「国益を守る」原点に戻るべき

土曜特集 インタビュー 日本外交の針路

東アジア情勢の緊張が続く中、2011年が幕を開けた。翌12年は米国、韓国、ロシアで大統領選、台湾で総統選があり、中国でも指導者の交代が言われている。北朝鮮でも節目の年とされており、日本を取り巻く主要国で、大きな政治的変動が見込まれる。その前年に当たる今年の日本外交はどうあるべきか。拓殖大学の渡辺利夫学長に聞いた。

拓殖大学
渡辺 利夫 学長

わたなべ としお　1939年生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業、同大学院経済学研究科修了。筑波大学教授、東京工業大学教授などを経て現職。日本安全保障・危機管理学会会長。主な著書に『成長のアジア　停滞のアジア』（吉野作造賞）など。

総合国力を競う時代
日米同盟の基軸を堅固に

〝危うさ〟から転回を

――今年の日本外交はどうあるべきだと考えますか。

渡辺利夫・拓殖大学学長　主権国家としての「国益を守る」という原点に戻らないと、日本外交は危うい。特に日米同盟の基軸を堅固なものにしていかねばならない。普天間基地移設問題で失われた信頼をどう取り戻すかがポイントだ。沖縄世論の説得、米国との重層的な関係の復元が必要だ。

――米国との関係を重視されていますが。

渡辺　日米同盟には、日本の安全を守るというだけではなく、東アジアの公共財としての側面がある。日本の勝手な意思で放棄されては困るという考えが東南アジアの国々には強い。日本は、日米同盟を基軸に、凛とした姿勢を保たなければ、アジアの国々の信頼まで失うことにもなる。

米国以外の全ての国の軍事力を合わせても米国の軍事力には及ばない。それだけのパワーを持っている国に、どの国が挑むというのか。日本が日米同盟を自ら放棄するのは愚策でしかない。

日英同盟廃棄によって日本がどんなに悲惨な状況に追い込まれたか。歴史的教訓に学ばなければいけない。

――現在の日本外交には多々問題点があるということですね。

渡辺　今は、総合国力を競う時代であり、これが厳然たる影響を相互に与え合っているはずだ。日本の総合国力には大きなものがあるはずなのに、稚拙な外交によって総合国力が発揮できていない。外交は「武器を持たないでする戦争」だと言われる。まともな国であれば、そういう気概で外交に臨んでいる。

前進しない普天間問題（写真は菅首相の沖縄訪問を前に、横断幕を掲げ抗議する人たち＝昨年12月17日　沖縄県庁前）

しかし、日本の場合、官房長官と外相と副大臣と政務官の数名の要人が外交をやっているようだ。今のまま拙い外交を続ければ日本の存在感は、確実に下がっていくだろう。

民主党外交の「変な軸」
政治主導という名の素人

――この1年半の民主党政権の外交政策をどう見ていますか。

渡辺　政権交代したのだから、一貫性を保ってもらいたい外交でも、多少の彩りの変化があってもおかしくはないと思うが、あまりにひどすぎる。深く考えられ、練られた外交政策に裏付けられた外交がなされていない。ポピュリズム（大衆迎合主義）の〝軽い一言〟で沖縄の世論を全て反転させ、交渉のテーブルに乗っていた日米の公式な合意事項を吹き飛ばしてしまった。米国の指導部に不信感を与え、不信を払拭するのに何年かかるか分からない。大変な努力を要するだろう。

――なぜ〝軽い一言〟が出てくるのでしょうか。

渡辺　政治主導という名の下で素人が外交をやっているからだ。「民主党の外交には軸がない」と言われるが、そうではなく、「変な軸」になっていると見ている。私は、それをポストモダニズム（超近代）の政治的気分だと言っている。国家とか共同体というものに価値を置かない。自由な個として生きることを良しとする気分だ。国家と言いたくないから市民社会と言い、国民を市民と呼ぶような気分だ。そういう気分の色濃い人々が集まったのが民主党ではないか。主権国家観念が希薄だ。イデオロギーや思想であれば、是とするか非とするか対立軸ができてくるが、そういう〝気分〟では議論にもならない。

――外交への影響は。

渡辺　協調や友好などと、耳に響きの良いスローガンを並べるだけで、日本には戦略らしきものがない。「国を守る」「国土は一ミリでも失わない」という気概と戦略がなければ、外交で勝つことはまずできない。

尖閣諸島の問題が起きた時、米国は尖閣諸島は日米安保条約の対象だと繰り返し発言したものの、どの程度本気か疑ってみることが必要だ。日本が本気で守ろうとしない島を、米国の青年が血を流しながら守るということがあり得るだろうか。日本人は一度胸に手を当てて考えたらどうか。

米国に限らず、他国は、戦略的に日本にどう対応していくべきか、非常に不透明なものを感じているだろう。

アジアの中の日本
日米中〝正三角形論〟は誤り
韓国との安保協力対話 印豪などと南北連携軸も必要

――ロシアとはいかがでしょうか。

渡辺　なぜ、尖閣、北方領土の問題が起こったか、今になれば、よく分かる。民主党政権になって普天間基地の問題で日米関係がガタガタして、「日米同盟が相当危ないのではないか」「試してみようか」と瀬踏みをしているということなのだろう、ロシア大統領の国後訪問は、尖閣問題の連鎖反応だ。日本は、そういう可能性があるという情報を伝え聞いたなら、すぐに「絶対に止めよ」「ロシアのために ならないし、日本の反ロ感情が高まる」という警告を、外交ルートを通じて発しておく必要が当然あった。それをやっていない。

――米中ロ以外の国との関係が、そこは好き嫌いではなく、戦略だ。

一部の韓国の知識人もそう考え始めている。北朝鮮による圧力と、延坪島での砲撃の後、南北双方に冷静な対応を求めた中国の姿勢を見て、「日韓関係はこのままでいいのか」と。

韓国は、日本よりも、もっと緊迫した課題を抱えており、そこで日韓の安全保障協力というテーマさえ議論されるようになった。

日米関係の揺らぎが原因か（写真は国後島の水産加工場を訪れたロシアのメドベージェフ大統領㊧＝昨年11月1日）　ロイター＝共同

また、長期的な展望で言えば、日米が中心とはいえ、台湾や東南アジア、インド、さらにオーストラリア、ニュージーランドを含めた長い南北連携軸をつくって大陸を牽制するという安全保障の大きな戦略が必要だ。特に、インドは非常に重要な日本のパートナーになるだろう。

少なくとも麻生政権には「自由と繁栄の弧」という構想があった。そういう発想は今の政権にはまるでない。むしろその日暮らしで、その場を取り繕うのが精一杯。長期戦略を考えるゆとりすらない。

ついては、いかがでしょうか。

渡辺　韓国との戦略的な安全保障協力対話をもっと緊密にしていかなければならない。日韓が同盟に至るとは到底思えないう、今まで浮上したこともないう、今まで浮上したこともない